中井弘関係文書の紹介（四）

堂満幸子

黎明館収蔵の中井弘関係文書について、これまで一、二、三集にわたり紹介してきたが、今回は、芳川顕正（八八）から公用方秘録（九六）までと、当人の中井弘（九七）の書簡等を解読し、この紹介を以て中井弘関係文書二三巻の紹介を終える。全巻を通して、差出人の氏名と書簡数は、第一集に「中井弘関係文書一覧」として掲載されているが、この一覧には点数に誤りがあったので、訂正を加え再度掲載する。

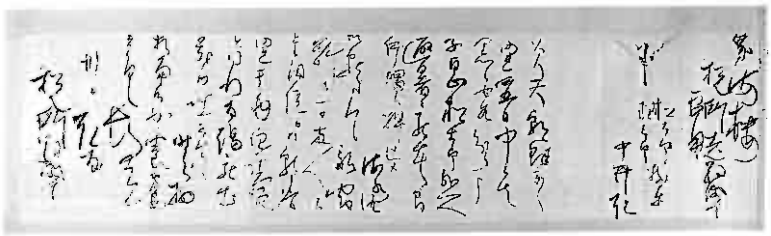
（中井弘肖像）

書簡の解読については、次のようにした。

1、解読順は巻物の順に従い、年代の考証はしなかった。
2、体裁は第三集にならい、適宜読点を付した。
3、漢字は原則として常用漢字を使用し、変体仮名は現行かな文字に改めたが、者、江、而、茂、与はそのまま残した。
4、判読できない文字は□で囲み、文意の通じない文字は（○カ）と傍注を付した。
5、原文の抹消は、その文字の左側に「、」を付し、右側に書き改めた文字を記した。
6、封筒もしくは上包の上書は「　」で囲み、封じ目の緘や封などの文字は略した。
7、郵便の消印からわかる年号は、日付に傍注を付した。

中井弘関係文書一覧

番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数	番号	氏名	点数
1	安藤　則命	1	21	川村　純義	5	41	白根　専一	2	61	長岡　外史	1	81	矢野　文雄	1
2	伊藤　博文	47	22	河瀬　真孝	3	42	重野　安繹	1	62	中江　兆民	1	82	山尾　庸三	1
3	岩崎弥之助	42	23	海江田信義	1	43	渋沢　栄一	1	63	永田　義近	1	83	山縣伊三郎	1
4	板垣　退助	4	24	加藤　某	1	44	末広　重恭	1	64	西村　捨三	5	84	山崎　直胤	1
5	井上　馨	4	25	樺山　資紀	1	45	杉　孫七郎	1	65	西村虎次郎	1	85	山田　顕義	2
6	井伊　直憲	1	26	川田　剛	1	46	清　一	1	66	野村　靖	3	86	山地　元治	1
7	伊地知正治	1	27	木戸　孝允	1	47	曽我部道夫	1	67	野津　道貫	1	87	由利　公正	1
8	井上　毅	1	28	黒田　清隆	10	48	高島鞆之助	2	68	原　敬	3	88	芳川　顕正	17
9	岩下　方平	1	29	黒田　清綱	3	49	田中不二麿	2	69	長谷川好道	1	89	吉田　清成	10
10	岩倉　具視	1	30	楠本　正隆	2	50	高崎　正風	1	70	晩	1	90	吉井　友実	8
11	岩倉　具定	1	31	後藤象二郎	12	51	高崎　親章	1	71	東久世通禧	2	91	吉原　重俊	4
12	上野　景範	4	32	五代　友厚	2	52	伊達　宗城	1	72	藤田伝三郎	1	92	渡辺　洪基	2
13	内海　忠勝	1	33	児玉源太郎	1	53	田中　光顕	1	73	松方　正義	8	93	渡辺　千秋	1
14	榎本　武揚	5	34	税所　篤	8	54	谷　干城	1	74	松本荘一郎	2	94	渡辺　昇	1
15	大東　義徹	5	35	佐々木高行	5	55	寺島　宗則	3	75	松本重太郎	1	95	井伊掃部頭意見書	1
16	大山　巌	7	36	鮫島　尚信	4	56	徳大寺実則	1	76	三島　通庸	5	96	公用方秘録	1
17	大井憲太郎	1	37	西郷　従道	3	57	鳥尾　得庵	1	77	三浦　安	1	97	中井　弘	15
18	大木　喬任	1	38	佐野　常民	1	58	長岡　護美	4	78	陸奥　宗光	1	98		
19	大谷　清	1	39	三条　実美	1	59	中山寛六郎	3	79	森　有礼	2	99		
20	尾崎　行雄	1	40	品川弥二郎	3	60	鍋島　直大	3	80	山縣　有朋	16	100		



（中井弘の論功行賞論と書簡）

八八　芳川顕正

1「中井桜洲先生　　越山
　親披　　」
来廿八日濱町常楼へ寵招奉鳴謝候、刻下多事中ニ候へ共、其刻果然差支無之候ハヽ、参趨之様可仕候、右御答迄、匆々拝具、
　五月廿七日　　越山
桜洲老先生

2「中井知事殿　　越山拝
　親展拝復　　」
風雨弄桜花、真ニ京洛風流客タルニ恥ズ、感服々々、警部長増俸及郡長兼任之儀ハ、既ニ上申済ニ相心得居候ニ、如何之行違ニ哉、本日直ニ取調御答申上候様可仕候、賦金之事ハ少茂今日迄承知不致故、能々清浦へ承知候様可致候所、盲捺中難聞届与参リ候時ハ、ドーデアロウ定而御怒ヲ蒙ルコト不少候半、今ゟ恐悚ニ不堪、其節ハコチラゟ阿弥佗仏与合掌可仕候、呵々、拝復、
　四月九日　　越山
桜洲老兄
　侍史

3「中井知事殿　　越山
　急啓親披　　」
拝誦、例之人物ニ付、色々御配意相掛、恐縮之至ニ不堪、拝鳳之節万々御礼可申上候、昨日拙書ヲ以彼人転局御取計被下候上ハ、其代リ云々申上候ハ甚以粗忽之至、本府も即今昇級ヤラ、色々取調掛候処、定額相満、即今之処ニ而ハ、拾五円之人、二人も採用候儀ハ出来兼候ニ付、何卒其儀ハ御取消奉願候、然ル時ハ貴省ニ而も彼人転局ハ御六ケ敷儀ニ候半ト、恐察仕候ニ付、此上ハ是非モ次第故、本人ゟ願書差出候ハヽ、何卒願之通免職被仰付候様、御取計奉煩候、毎々色々面倒ナル事而已恐々縮々、御寛恕被下度、先ハ要事迄御答申上度、匆々拝復、
　十二月廿日　　顕正
弘翁
　侍史

4「中井弘殿　　芳川顕正
　拝復　　」
拝展、陳ハ別紙添縷之御書中之趣了承、何れ分り次第尚可申上候、取急拝復、匆々敬具、
　八月三十一日　　顕正
弘老兄

5「県令中井弘殿　　内務少輔芳川顕正
　至急親展　　」
過頃ハ度々見事之土産御恵投ヲ蒙り、鳴謝々々、
春翁も帰京来至極壮康、迚モ守旧連の我々等ハ、当ルベカラザル勢ニ有之候、新得之佳人も此間ニ至而ハ、格別之風味も無之モノト相見、近来ハ御旧跡否芳街の小佳人ヲ愛玩斜メナラザル趣ナリ、又去ル五日ハ離宮宴散後、世外・春翁横浜行相催弟モ被誘、野毛山辺へ一泊、両翁ハ新ニ得モノ有之、併シ為対モノニ無之、新橋辺の腐妓ナリ、両翁共ニ其翌朝ニ至リ、大ニ後悔の色ヲ顕ハシ、面白事ニ御座候、弟ハ別

ニ得ルモノナク、其夜ハ独寝、遺憾相覚申候所、翌朝両翁後悔の体ヲ見而、却而ヨカツタト相笑申候、二橋頭共ニ近来尤物ヲ出ダサズ、想フニ是レ伯楽ノ居ラザル故ナリ、ト信用仕候、反之京坂間ハ多々出現候半ト、垂涎ニ不堪、山翁帰京候ハヽ、チト為骨休上国辺ニ出張ト出掛度ト心組居申候、貴地之陰聞も候ハヽ、ちと御漏被下度候、再白、

6「中井工部大書記官殿　芳川顕正」

親展拝復

拝読、今夕より愈々御帰任之趣、敬承致候、今朝御談話致候件云々亦承知、是ハ未評議ヲ尽タルモノニ無之故、何レ速ニ詮議之上、何分之事申上候様可致候、先其迄ハ其侭ニ被成置度候、果然治定候ハヽ、可成都合能為運、且地方官之上京もナクテ相済候様致度、希望仕候、御承知之通、内務大臣モ留守中故、其此不都合不少、御諒察被下度候、右御答迄差掛リ得貴意度、匆々拝復、

六月四日　越山

中井先生

7「中井弘殿　顕正」

至急親展

拝啓、昨夜突然一坂書記官より之書面ニ、両三日前、俄然重症之中気ニ御感染被成候趣相見、驚愕致候、肥満我輩ノ如キハ、常ニ中気ヲ恐レ居候ヘ共、老兄之如キ体格之人ニ在り而ハ、其掛念ハ無之事ト信居候処、サテ々々意外千萬万之事ニ有之候、尓後之御経過ハ如何ニ候哉、申進候迄モ無之候ヘ共、十分御加保専一奉存候、斯ル国家多事之際会ニ在リ、一日モ速ニ御全癒ニ相成候様、万望之至ニ御座候、不取敢一書ヲ修シ、茲ニ御見舞申上度、匆々拝具、

十月四日　顕正

中井老閣

侍史

8「滋賀県知事中井弘殿　芳川内務次官」

必親展

拝読、尓来愈々御多幸之趣、過日春畝翁より親シク拝承、奉恭賀候、同翁も過日京坂之漫遊ヲ為済一両日帰京、直様小田原城へ籠城被致候、小生も前之土曜より一泊掛ケニ而、翁ヲ小田原ニ一訪候処、恰モ羈勒ヲ脱シタル奔馬ノ如ク、其騰驤之光況、壮年時ニ異ナラズ、之ヲ避クル蛍二舎ノミナラズ、京坂ニ而も同様ナリシナラント被察候、小田原百畝之邸宅ハ、他日八洲之野ヲ蔽フ如キ大廈ト相成候事、早雲氏ニ異ナラズト被存候、互撫先生も頗ル多忙ニ而、東奔西走ニ寸隙ヲ余サツルヤウ見受、其国家ヲ憂慮スル之有様、感服之外無之候、貴県下水害補助費之事、尓来色々尽詮議候ヘ共内則ニ触レ、結局之論定如何可有之哉、掛念仕候、本年ハ処々之水害ニ而、毎日方々より補助々々ト申出候ニハ、国庫も大ニ困難ニ見受申候、

含雪翁帰朝来困難之局面ニ当リ、殆ンド日夜ヲ不分鞅掌被致候、併シ世外翁モ明日位ニハ帰京可致与之報アリ、何レ二周日以内ニハ諸事整然ト相定リ候半ト被察候、

陳者来示草履取新聞云々ニ付、一新紙ヲ御起シ被成度ニ付、五千円計入費云々、致承知候、御見込之次第、至極賛成申上候、差当り三千位ナレバ直チニ出来可申見込も有之候処、右ニ而ハ不足ニ候哉、尚御意

中伺度、今一層御取調之上、御答被下度候、其上ニ而残金之分、果然入用ニ候ハヽ、再考可仕候、豹変之世体ヲ矯正スルタメ、今日ゟ其用ヲナサヾルベカラザルハ至極御同感ニ存申候、含雪翁ニ御見込之程、談話候処、至極妙也ト被答申候、五畿咽喉之地ニ而確乎タル独立党ヲ以、御尽力相成候ハヽ、定而其効果少カラズ候半ト被信申候、右者何ヤラ角ヤラ取紛ゼ、拙答迄得貴意度、時下微寒、千万御自重奉祈候、

匆々頓首、

（明治廿二年）十一月十六日　　越山

桜洲先生

侍史

9「山下門内帝国ホテル

中井弘殿　　芳川顕正

至急親展

」

拝啓、一昨夜長座、久振ニ而高話拝聴、胸塵為ニ浄尽致候、其刻御談話之事ニ関シテハ、昨朝世外伯ニ面晤之折、寛々懇談致候処、於本省取調之上返答可致約束ニ而相別レ申候、多分一両日中ニ者、何分乎相定リ可申存候、右不取敢御答迄得貴意度、匆々拝具、

（明治廿六年）十月廿八日　　越山

桜洲老兄

侍史

10「中井工部権大書記官殿　　芳川顕正

至急　親展

」

赤坂区霊南坂町壱番地、貴省官舎今般当省御譲請致候、就テハ同官舎附属装飾品雑品共御引継相成候様致度、此段及御掛合候也、

明治十四年十一月七日　　桜田外務権大書記官（花押）

中井工部権大書記官殿

拝読仕候、桜田ゟ之照会書ニハ、御申越之通検印之上、返却仕候、例之椅子云々、是亦承知、是ハ拙子ゟ未ダ代價ハ相払不申候ニ付、唯其侭御引取被下候ハヽ、拙子之手元ハ相済可申候、御都合次第御引取奉願候、御答迄得貴意度、匆々拝復、

十一月十六日　　顕正

中井翁

11　暮春送小林詞兄之哥児倍港

休嗟匹馬負芳辰　塞北由来応未春

東帝有情遅汝到　梅桜菲李一時新

12「□（被カ）賀県令中井弘殿　　芳川顕正

親展

」

到処紅緑ナラザルハナキ之好時節、愈々御清佳御奉務之趣、奉恭賀候、過頃来ハ度々御書面ヲ賜リ、且貴書記官并収税長等ゟ親切御伝言被遣、奉鳴謝候、即時答書ヲ呈之所、不相変筆無精ニ而、等閑ニ付去リ失敬不少、御海恕是祈候、尓来小生も依旧消光、御休意被下度候、内務卿も客月来帰京相成候所、留守中愛児之不幸ニ遭遇シ、愁傷不一方、無間細君ト共熱海行被企、今猶留守中ニ御座候、夫故御留守番役ヲ蒙リ、毎日小弟も両衙門之間ヲ奔走仕候、

貴書中御縷述之不認可一件も疾ク為相運可申之所、御承知通リ此間来

ハ本省之秋ニ而、各府県ゟ其会議之始末伺出多々有之、主務局員も日夜鞅掌大ニ手間取、定而御待永キ事と恐察仕候、御伺之儀者稍々今朝迄ニ議論相決候ニ付、明日位ハ多分指令ニ可相成ト被考申候、名公之御申越故、マサカ御顔ノ立タザル様之指令ニハ不相成方ト被察候間、御安意被下度候、

如来諭大使一行モ首尾能帰朝、実ニ東洋史中ニ特筆大書不致而ハ不叶事ト、御同様為邦家大賀此事ニ御座候、先ハ乍延引御答迄得貴意度、長ハ後慮ニ付申候、匆々拝具、

五月十一日　　越山拝

桜洲老兄

侍史

13「工部省

中井工部大書記官殿　　芳川顕正

至急親展

」

昨夜ハ大ニ御馳走ニ相成、奉鳴謝候、陳者過頃来願置候例之人物ハ、何与歟御趣向有御座間敷哉、実ハ先日平岡君態々来話之次第も有之、其侭打過候而ハ関心ふり旁御依頼申上候次第ニ御座候、就而ハ本人江一旦辞表可差出様今朝申通置候間、定而今明日中ニハ其運ニ可致ト心算仕候、然処兼而ゟ御依頼申上候通り、大学校又ハ新橋ニ而も転局之御都合ニ御取計被下候ハ、、勿論無此上仕合ニ候へ共、万一御不都合ニ候ハ、、願之通り免職相成候様御取計偏ニ奉願上候、実ニ毎々面倒ナル御配意相成、御気之毒ニ奉存候へ共、小弟モ夫是情実ニ引カサレ、強顔御願申上候次第故、御寛恕是祈候、右指掛御依頼迄匆々拝具、

十二月十九日　　顕正

中井老兄

侍史

14「工部省

中井工部大書記官殿　　芳川顕正

御直披

」

明日ハ漠然タルコトニ候へ共、前約有之候ニ付、介然御同伴可致段ハ申上兼候間、左様御承知被下度候、匆々拝復、

三月十三日　　顕正

中井老兄、

15「中井弘君　　芳川顕正

至急親展

」

過日工商会社ゟ差越候銅花瓶其外、有田公使御一覧、御取残し置相成候分、別紙之通同会社ゟ差越候ニ付、公信局迄仕払方申入候処、同局ゟ伺相成候へ共、未タ卿輔御承知無之趣ニ付、仕払方差支候間、公使御携行相成候儀ニ候へば、至急卿輔迄御申立之儀御取計相成度、此段得貴意候也、

二月二日　　外務省

中井弘殿　　用度科属

16　来ル十一日築地寿美楼於而小酌相催度存候間、同日午後三時ゟ同処へ御来臨被下度、致希望候也、

三月八日　　芳川顕正

中井弘君

17 来陽早々云々之事、今朝山伯ニ面晤之折相談候処、其御企図之事ハ過日卒尓ニ梗概ヲ承候迄ニ而、詳細之件ハ承知不致位ナレバ、考慮も熟シオラズ、且右札之事ニ付而ハ、世外翁も同様之考案ヲ有シ居候趣ナレバ、一応世外翁ト打合候上、篤ト相図候而ハ如何与之事故、小生今明中ニハ是非共同翁へ遂面会候上、尚ヲ老兄へ御談話申上度、就而ハ今両三日御出立ヲ御延シ被成、世外其他へ御協議相成候而ハ如何哉、生世外ト談話之都合ニより、松伯へも相談可致含ニ御座候、唯今帰路貴寓へ相訪候處、御留守ニ而、出先モ不相知与之事故、以書中指掛右得貴意度、御一考相成度候、匆々拝具、

十二月十四日　越山

中井先生

侍史

八九　吉田清成

1「築地二丁目　吉田清成」

中井弘殿

内披急キ

午後より宮嶋氏、吉井翁与共ニ来訪之筈、故ニ寺島先生へも促置候、幸土曜故貴君ニも御隙与奉存候間、安田なり、誰某なり一両名御同伴御来車被下候ヘハ、至幸奉存候、尤書家御同道被下人材相叶候得者、一種快楽ヲか可申与奉存候、豚之汁位は此白金之田舎ニも出来可申、又両国橋はたしか沢山用意いたし居、御掛念ニハ及ヒ不申、尤今少々別品ノ酒御持参被下候ヘ者、仕合之至なり、不一、

三月廿五日午前十一時　晩翠拝

桜洲翁

左右

なりたけ速ニ御来臨希候、

2 浅井・伊集院等葬送之儀等尽力致し候事ニ有之候、

尓後弥御無事御着英之筈、奉大賀候、陳ハ小生始同列之人々、本朝十月九日発般、当月十六日着府いたし、無異相勤居候間、御放念所希候、御愛母御事終ニ御養生不相叶、十月六日七ツ頃御誓去被成、誠ニ御笑止之至御座候、併人生限あるものなれハ、詮方なき事ニ有之、僕等ハ十四才ニ足らすして母ニ離れ、打続キ十五之夏、頼ミ切たる親ニ別れ候次第、夫れニ比較すれハ、老兄ハ遥ニ天之愛恵を得たるなりと思ひ玉ふべし、人力之不及所なり、

右御惜旁御安否相伺度まて、匆々如此御座候、頓首、

十二月廿一日　清成

中井弘様

3「中井桜洲様　吉田清成」

親展

愈本日出立、熱海行仕候、先日より御頼談仕置候一件ハ、成ル丈ケノ事ならハ、是非御周旋被下度奉頼候、外務ノ方ハ必ハ難被行乎も測かたく、井上氏と御熟談宜キニ御取計被下候儀も候得ハ、多謝之至奉存候、昨日ハ鳥渡退省掛御立寄可申と存候処、五字よりパークス参候筈ニ約置候付、不得止事急拠帰宅仕候付、其儀不相叶次第御座候、若シ御寸暇も御座候得ハ、弐三日四日御出懸ハ如何、折角御待申上候、松

方も今明日着浜之筈と、昨宵承知仕候、何れ珍説沢山可有之と存候間、御洩被下度候、匆々頓首、

二月廿八日十二字　晩翠拝

於神奈川駅

桜洲先生

侍史

4「中井弘殿　吉田清成」

乞貴答

五七輩之好友を招キ、笥抔を扱度奉存候間、明廿九日午後三時より御枉駕被下候得者、望外之至奉存候、頓首、

三月廿八日　晩翠拝

桜洲翁

侍史

御諾否鳥渡為御知被下度奉頼候也、

5「中井弘様　吉田清成」

外ニ一ケ添托梅田芳之□

卅日

拝読仕候、小倉氏身上之義ニ付云々、御下示被下候処、御即答ハ仕兼候、今明日中ニハ相見得次第喩可申候、何卒今一級ハ御気張被下候様仕度候、田中でさへも二等属相等と可申事歟、然れハ之レニ今二等も下り候、手并し人ニ而者無之、其辺ハ御含置キ可被下候、英学ハ充分ニ出来、語も達者、算同断、訥且黙、加ルニ気象アリ、未頼母敷人ニ有之候、酒ハ一滴も不呑、性ハ惰ナラス、沈々勉強ノ儀ハ人ニ譲らす、むだ金ハ不遣捨、其証拠ニハ昨年帰朝後、于今他借等無之、畜積之分ヲ以家内ヲ養ヒ居候等ヲ以察スベシ、右辺ハ吉川等平岡等も相信シくれ候様いたし度候、老兄へ偏ニ御依頼申上置候間、御周旋被成下度候、頓首、

三月卅日　清成拝

桜洲雅翁

追伸、葉まき少々差遣候間、御枯シ置キ被成候ヘハ、不遠内呑メ可申と奉存候、

6「中井弘殿　吉田清成」

親披

十六日

昨日者種々御馳走ニ罷成、奉多謝候、又帰途之興も久振之一快ニ御座候、国許より頃日送致之鰹節少々令閨君へ進呈候間、御笑留被遣度候、かのたばこハ余り多分ハ残り居不申、五百本差上候間、ナラハ半年程も乾し被置候方、香味相加可申与奉存候、

花房氏之葬式ニ者荊妻も是非差越与之事故、弥何日何時ニ候哉、御序ニ御しらせ被下度候、氏在国ナラハ菟ニ角ニ外行中ニも有之、旁拙子ニも御同道、其式ニ加り候含ニ御座候、

いつれ不日御繰合せ、建築上之御指南被遣度奉願事候、敬具、

五月十六日　晩翠

桜洲翁

侍史

7「中井弘様　　吉田清成

煩親拆　　」

炎暑難堪候処、益御多清御毎勤之筈、奉恭賀候、然者少々御頼談仕度義有之、先日者一寸参楼仕候処、御留主之折ニ御座候、他之事ニも無御座候、拙帰県前御頼仕置候草道之事ニ御座候、既ニ川村氏へ御話被成遣候哉如何、同人義ニ付テハ、左近允方迄ハ既ニ頼ミ入有之由ニ承り、同人直縷ニ此一封ヲ呈シ、尚委細ハ其折御依頼可申上与存候間、可然御尽力被下度奉頼候、先度モ御話申上候通、川村氏へ拙より直ちニハどふも頼入兼候間、右辺御含老台より賛助ヲ仰候次第御座候、何も面上可申上候、頓首、

八月廿四日　　清成

中井様

侍史

8「中井桜洲様　　清成

急

昨夜ハ少々御相談仕見度義有之、貴洞を訪候処、何か御企之御様子ニ而、却而御妨ト存シ、空敷帰途ニ車を向ケたり、実ハ円朝之居所も不分候故、貴兄より御一封を煩度存居候処、右之次第ニ付、不取敢清元ノ先生迄、頼ミ為遣置候得共、不安心ニ存候間、郵便ニ而も宜布、御一封円朝へ直接御差出置可被下候、繰合セ出来次第ニ而も宜布、尤一時前より夕まてなれハ好都合也、卅一日ハ本省挙参集、外ニハ単ニ改正掛トカ、又ハ何分か外務ニ関係ノ人のミニいたし申候、寺島・伊藤・建野・芳川・大島を除ク之外、誰モ他よりハ相招キ不申候、当日ハ万事御賛成被成而、余り乱雑ニ不流様いたし度候間、右辺ハ御気取御揮採所冀御座候、懇親会を離散会ニ化せしめたく無之、御推量可被下候、本日ハ鳥渡なり共得拝眉度候得共、両三日来非常之風邪気故、終日保養仕度、夫故一楮如此御座候、草々、

一月卅日　　翠拝

桜洲翁

左右

9　小触之権右衛門か持そふな煙草入ハ奪かえされ、夜市之こぼんと田舎の晩茶はおまけニだん々ニされ、隠ニ銀瓶ナル餅ニ望あるヲしル、こふなつてはもふ仕方もなし、進呈せさるを得す、併シ此餅ナル瓶ハ他ニ御譲不被下候様いたし度候、ブリツキ入之茶ハ御断申上候、江戸ニ而難得ければナリ、穴賢々々、

一月十日　　晩翠

中井君

机下

10　御約束之金子弐百円、桜田半之助ヲ以為御持被下、正ニ査収仕候、御返金之儀ハ、如命両三ケ月中ニハ可仕候間、左様御承知可被下候、尤利子之義ハ、三分普通之例ニも有之候間、必す相当之息ヲ付ケ、御返金之つもりニ御座候、尤庭之儀ハたゝのりニ御覧ニ入度奉存候、この金ニ而大抵整頓、石も数多、木も多少持込相整可申与奉存候、右まて草々頓首、

九月十五日　　清成

中井弘様

左右

尚後刻も拝眉仕、御厚礼可申候、

九〇　吉井友実

1「□□弘殿　　吉井友実」

金壱円拾四銭九リ

右差上候間、可然御頼申上候、過日申上候比志嶋儀ハ、石井江宜御頼被下度願上候也、

五月六日　　友実

中井様

追而今夕いち、正治江税所・宮嶋と五時比ゟ参、鰻飯といたし候積、御隙共候ハヽ、御出掛被成ましくや、

2「工部省

中井弘殿　　吉井友実」

別紙之通申遣候間、可然御取計被下度、致御依頼候也、

九月十八日　　友実

中井弘殿

3「中井弘殿　　吉井友実

拝復　　」

昨日者売茶江御出ニ付罷出候様、御紙面被下候処、如何之間違ニ候哉、今日拝見、残念ニ候、猶又明日茂参上可致旨、難有奉存候得共、早朝ゟ紅葉狩ニ出掛候積、何レ又御馳走被下度、此段御報早々如此候也、

十一月十七日　　友実

中井君

座下

4「中井様」

精養軒割前不埒いたし候、宮島と両人分差上候間、御落手可被下候、石炭ハ御面働成上申候、来ル十八日大山等食事之筈、御差支無之候ハヽ、夕六時御来車、御差支ならハ一筆御しらせ可被下候也、

十一月十四日　　友実

5「中井様　　友実」

口代

大山ゟ聞ケハ、又少々御不快之由、折角御用心専要也、豚と薩摩酒少々持帰り候間、差上候也、

六月十日　　吉井

中井様

6「中井弘殿　　吉井友実」

馬車鉄道会社江、米国馬車一輌預置候間、宅迄引来候様、石川江御声被下間敷哉、若能キ買人有之候ハヽ、売払度、いつれ共可然御取計被下度願上候、猶明夕加藤ニ而御頼可申上候、頓首、

二月一日　　友実

中井様

7「中井様　　友実」

拝見、又少々御痛ミ之由、折角御大事可被成候、扨明後廿三日税所、得能御招請、茶会席御催ニ付、参上候様忝存候、早速両人江相通し、差合無之候ハヽ、其旨早々可申上候、此旨貴酬早々如此候也、

十月廿一日　　友実

中井君

追而代印之儀ハ、猶篤与勘考之上差上可申、左様御承知可被下候、

8「中井弘殿　吉井友実」

過日御帰京之由、定而佳話も多カルヘシ、明夕西郷・大山等会食之筈、井上江も約置候鉄道話も可入御聞候間、午後御来車被下度、此旨早々頓首、

十月卅日　友実

中井雅伯

硯北

九　吉原重俊

1「中井弘殿　吉原重俊」

親展

来ル九日古書画展観会被相催ニ付、参趨可致候様相承候処、生憎当日ハ九鬼方ニ而晩餐之前約相請居、乍残心御断申上候、不悪御承了被下度、右迄艸々如此、拝具、

四月七日　重俊

中井君

2「中井弘殿　吉原重俊」

親披別包相添

御手簡拝承、御申越之西洋年表とは、別包万国年鑑之事ニ可有之存候間、則御送付及候、若右之書冊ニ無之候ハヾ、尚委細御申越有之度候、尤右ハステツマンイヤルブーク之翻訳ニ有之候、右迄艸々、拝具、

四月廿一日　重俊

中井君

御追申之趣承知、少々差支有之、参会致し兼候も難計候得共、可成ならば罷出候様可致候、

3「工部省　吉原重俊」

中井権大書記官殿

親展

先日粗御咄申置候御客様左之件、来月三日と相定、已ニ昨日諸方江招状差出申候、同日ハ余人江者五時比と申遣候得共、尊兄ニ者成丈早目御光臨被下度奉希候、尤御家ニも御来臨相願候、定し上野なとハ参り被呉候事と存候、右而已艸々、拝具、

十一月廿九日　重俊

中井君

机下

4「工部省　吉原重俊」

中井権大書記官殿

親展

両日以前相伺候処御不在、拝晤を不得残心ニ存候、偖而此次の日曜日、則廿日ニ者、深川材木貯蓄場内拝借銃猟致度、何卒右許可之処御周旋希候、然か否両三日中ニ御知被下候ハヾ、多幸存候、右御願用而已、艸々拝具、

十二月十六日　重俊

桜洲山人

机下

九二　渡辺洪基

1「中井工部大書記官殿　　渡辺洪基

親展　　」

本日夕刻より高崎正・山県天外御誘引ニ而孤々御越候付、御倍席可致旨、難有奉存候処、小生此程中より風邪気ニ而、本日中引籠養生仕候事都合いたし候義付、乍残念参会仕兼候、偖一昨夜者依例長座御妨仕候、併久振ニ而快談拝聴難有奉存候、其節相願度ト存候処、他人同席旁差扣候ハ、岡山人・伊東信夫ト申者、夫々学識も有之、是迄実歴も御座候者ニ而候処、当今事業ニ逸れ、殊之外窮困罷在候、何卒御手下之御採用被下候義、御都合被成下度、花房・小松原ゟも相願置候由ニ御座候ハ、小生も兼而知人ニも有御座、同人為人も承知仕居候者ニ御座候ニ付、此義伏而奉懇願候、余は拝鳳、草々不備、

十一月一日　　渡辺洪基

桜洲先生

侍史

2　此節者府下も日々快晴打続、所謂橙黄橘緑之好時節ニ御座候、御出先者猶更ト奉存候、先年漫游之際、九州ニ在りしハ、丁度唯今頃ニ御座候、坐ニ当時ヲ想起シ、元老院ニ起座スル之無聊を覚候、艶羨之至ニ御座候、偖令嬢御事、兼而原敬氏へ御遣し之思召も有之候処、此度結婚之上任国へ相伴度望ニ付、近々以電報相伺候処、御承諾相成候ニ付一同大慶、諸事伊集院氏取計相成、万々都合能相整、昨夕一応原氏宅ニ而小式之後、築地寿美屋ニ於而祝宴相開キ、山県・井上両参議も来臨、御老大人始メ、本田・吉田・松村・中村博愛之諸君、本田・吉田・中村者夫人同道、小松原・斎藤修一郎夫婦、伊集院并ニ小生、阿部も夫婦、其他一条基緒、外南部人数名、南部利恭氏も来会候間、極而盛宴ニ有之、一同大歓ヲ得候事ニ御座候、恰隣席ニ華族之集会洋行遠ト ノ事有御座、小生も其方へ被延候処、大久保利和君ニ出逢候間、此話いたし、同氏も其処へ被臨、尤好都合ニ御座候、両家共御一同無此上事ト大慶被致候、御安心被下候、令嬢も余り御年若故、令閨君始御案シ申候得共、皆々其辺篤ク注意いたし、婿殿も極而丁寧ニ取扱候筈ニ御座候間、必らす不都合ハ有之間敷ト奉存候、其地ニ而御面会可被成、尚又宜敷御教示奉煩候、当地相変候事無御座、兼松直稠近頃チーフ之大気ニ入ニ相成、奏任八十円之御用務ニ相成、秘書記官ヲ以テ三十円之加俸、旁大悦ニ奉職罷在候、又伊参議ハ参事院ニ復スルト之内評も有之候、何れ来月頃ニ者何歟小変更ニ而も可有之哉之空言ニ御座候、余者付後鳴、賀事御通報迄、尚宿醒渾々不堪縷陳、草々擱筆、

十二月五日朝　　渡辺洪基

中井先生

座下　　頓首

九三　渡辺千秋

1　謹啓、只今拝承仕候鷹之儀ハ、軍国之折柄ニ付、宮内省ニモ如何様とも差繰継続仕候事ニ決定仕候間、左様御承知被成下度、爰ニ要領のミ申上置候也、早々敬具再拝、

十二月八日　　千秋

山県元帥閣下

九四　渡辺昇

拝上、昨日者蒼卒中不参候事、明日午後御支無之候ハ、、御尋申上度、委細者拝鳳之上と、草々頓首、

七月廿九日　　昇

中井豊堂

尚々、万一御支も候ハ、、西ノ宮隣村今津千足利右衛門宅まで御一報被下度、其事無之候ハ、、参上可仕候也、

九五　井伊掃部頭意見書

嘉永六年八月幕府の諮問ニ対へられし上書写

表紙ニ　別段存寄書　下書

寛永十二年以前ハ、長崎・堺・京都等ニ御朱印船九艘有之処、大猷院様御代耶蘇御制禁ニ付、右之九艘航海御停止、閉洋鎖国之御法被為立置、通商ハ支那・和蘭ニ限り、其余ハ一切御免許無之候、然ルニ当今之勢ヲ以篤と相考候処、近年外寇之萠芽を察し、頻りニ患国之英雄、憤士之先識議論紛々たりしを、今時之急変ニ相臨候而者、御古代之如く前条閉洋之御法而已を押立、天下静謐、皇国安体之御所置可有之共不被存、尤海防之全備年月を経てハ難行届候、抑慶長十四年五百石以上之兵船廃毀以来、皇国沿海大砲ヲ以、外寇ニ可敵対之軍艦無之、唯今ニも八丈島・大島其外独立之島々足掛ニ乗取候時ハ、其侭ニ難差置候得共、兵艦なくてハ追討之術計何分無心許奉存候、籠城に橋を引候得者居すくみニ成、始終ハ難保、又川を隔戦ひ候ニも渡して打て掛り候方勝利を得ると伝承候、行く者ハ進取の勢あり、待者ハ退縮之姿ニて、古今之勢必然ニ相見え候、

祖宗閉洋之御法ニハ候得共、支那・和蘭之橋はかりハ残し被置候、今此橋を幸ひニ外国之御所置可有之事、暫く兵端を不開、年月を経て必勝万全を得る之術計ニ出可申哉、此度亜墨利加所望之石炭も、九州ニ多く出候由及承り申候、当方ニても必用云々之権道を以、先去申上置候得共、是等も彼れ洋中臨時急用之時ハ、長崎ニ来て可求、有余あらハ可遣、薪水ハ惜しむ所ニあらす、食料ハ国々豊凶ありといへとも、漂流難民にハ与ふへし、又漂着之難民ハ近年撫育し送り返し候如く、今更不及詮義、万事蘭人ヲ以可申出、扨又交易之儀ハ国禁なれと、時世ニ古今の差あり、有無相通するハ天地之道也、

祖宗之神告て以来ハ、此方より商船を和蘭会所咬嚕吧之商館へ遣して交易すへし、交易之品是ハ亜墨利加、是ハヲロシヤと分売するハ蘭人ニ任して、互市すへし、尤航海大艦を新造すれハ、今一両年を経へしと、大躰蘭人同様之御取扱ニありて、ケ様ニ彼か不意ニ出置、扨寛永以上之御朱印船を復古し、先ツ大坂・兵庫・堺等之豪商ニ被命、其株を与へ、堅実の大軍艦初蒸気船を新造して、日本無用之品を積込、水主船頭ハ暫く蘭人を雇ひ、剛直ニしてしかも心利たる者共を乗せ交へ、大砲之矢利大船之取廻し針路之法を学はせ、表ニ商船を申立、内実ハ専ら海軍之調練を心得、追々船数を増し習熟し、日本人自在ニ大洋を乗廻し、蘭人の密訴を不待して彼地之容躰を実見し、他日海軍之全備をなし置、又是迄恐嚇欺罔之憂を看破し、奢侈空費之弊風を変改し、武備厳重ニ内を十分ニ相とゝのへ、勇威を海外ニ振ふ様ニ相成候ハ、、末々居すくみニ不相成、内外充実、却而皇国安躰ニ可有之哉と奉存候、此方ゟ先んして仕掛置候ハ、、時宜ニより何時ニても御制禁ニ成候はん事、寛永度之如く、兎角彼を寄せ付さる処良策と被存候、将又

妖教之禁ハ如何様ニも厳密之御仕向も可有之候、亜墨利加・亜魯剌も航海之術ハ近年習熟致候由、吾　皇国之人性怜悧敏疾、今より習練致さハ、いかて西洋人ニ劣り可申哉、国躰時勢を量り、永世　皇国蕃夷之憂なく、海内静謐ニ御守護被遊候ハヽ、たとへ　祖宗之御法ニ沿革増損御座候共、却而神慮ニ被為叶候はん歟と奉存候、尤今度之御処置専ら海内之信義を得させられん事、肝要と奉存候へハ、第一　天朝ニ被達、伊勢・石清水・鹿嶋等へ　勅使、日光山へ者台使を被立、海内静謐、国家安全之御裁断可有を被告、兎角　神慮ニ被為任候はん事、神国之旧典、且人心をして一致なさしむへき御計ひ歟と奉存候、今御府内近海之御軍配者ニよりてハ、不慮急変之前銘々之覚悟容易之筋ニ無御座候得共、片時も難被相置、たとへ幾重之鉄壁を被築候共、異変ニ臨候而者必人和ニ不相及、兎ニ角一同安堵之御裁断ありて、夫々之号令を可被示事、即今之御急務所仰ニ御座候、右之趣御制禁ニ違ひ候見込ニ付、奉恐入候得共、無遺策十分之処申上候様被仰出候ニ付、奉申上候、以上、

八月　　井伊掃部頭

九六　公用方秘録

安政五午年公用方秘録

六月十九日

一例剋御附人ニ而御登　城、七ツ時御退出、

今日応接懸り井上信濃守・岩瀬肥後守金川より罷帰り申出候者、英仏之軍艦数十艘渡来致候趣、尤モ清国ニ十分打勝勢ひニ乗し、押掛候事ニ付、応接方甚御面到ニ可相成、乍去仮条約書ニ御調印済御渡しニ相成候ハヽ、如何様ニも骨折、御迷惑ニ相成不申様取計可申旨申聞候間、三奉行始御役人中一同御評議ニ相成候処、軍艦数十艘渡来之上御免しと相成候而者、御国威も不相立ニ付、只今御免しニ相成候方可然旨、異口同音ニ御申立被成候間、天朝へ御伺済ニ不相成内ハ、如何程御迷惑ニ相成候とも、仮条約調印ハ難相成旨被仰候処、□□と御同心被成候者、若年寄本多越中守計ニ而、其余之衆ハ何分数十艘引受候上之応接と相成候而ハ、仮条約丈ケニ而者相済不申様相成可申、実以不容易義□□　天朝より被仰進候義も御国体を穢し不申様との御趣意ニ付、古制ニ泥ミ居候而者、憂患今日ニ十倍可致、無拠御訳柄御申解ハ如何程も可有之候得とも、一旦争端を開き候而ハ、　皇居初沿海御手当も行届不申事ニ付、調印致相渡し候より外無之旨御申立ニ而、尚御考可被遊旨被仰、御部屋へ御帰り、尚御評議被成候所、堀田備中守様・松平伊賀守様ニハ、素より御許し可被成御底意、其余方々様ニも指当り致方も無之ニ付、成丈為引延候方可然趣を以、井上・岩瀬之両人御呼、如何様ニも骨折、　天朝へ御伺済ニ相成候迄引延し候様被仰候処、信濃守被申候ハ、仰之趣奉畏候得共、不及是非節ニハ調印可被仰付候哉と御伺被成候間、其節ハ致方無之候得共、成丈ケ相働候様被仰候へハ、肥後守御申ニハ、初より左様之了簡ニ而ハ迚も行届不申ニ付、是非共引延覚悟ニ而応接可致趣御申被成、則其趣を以御伺済ニ相成、両人ニハ御出立被成候由、御帰館之上被仰候ニ付、御前へ罷出、譬　公方様へ伺済なりとて　天朝之御沙汰を不被遊御待、条約書ニ調印御達被遊候ハ、全く隠謀方之術中ニ御落入被遊候と申者ニて、御違　勅と申唱へ、必す讒奏可致、実ニ御□之御大事、其罪御前御壱人ニ御引受被遊

候様可□成ニ付、急速加奈川へ御使を以調印御指留被遊候様申上候処、公方様へ伺之上既ニ相達候事ニ付、今更私ニ指留候訳ニハ難相成と之御意ニ付、猶又平常　天朝を御尊敬被遊候御前ニて、京都之御沙汰を不被遊御待、右様被遊候ハ如何之御次第ニ御座候哉と、段々御迫り申上候ハ、、其方共申処一理尤ニハ候得共、事危急ニ迫り勅許を待候余日無之、猶又海外諸蕃の形勢を考察致候ハ、、古昔と違ひ航海之術ニ達し、万里も比隣之如交易通商を開き、其外兵器軍制等皆実戦ニ試ミ、国富ミ兵強く、強て之を拒絶し兵端を開き、幸ニ一時勝を得ル共海外皆敵と為す時ハ、全勝孰れニ在る哉、予め量るへからず、苟も敗を取、地を割き償ハさるを得ざる場合ニ至らハ、国辱焉より大ひなるハなし、今日拒絶して永く国体を辱しむると、　勅許を待して国体を辱めさると孰れか重き、只今ニてハ海防軍備充分ならす、暫時彼が願意を取捨して、害なき者を択ミて許すのミ、且朝廷より被仰進候義ハ、御国体を穢さゝる様との御趣意ニ有之、抑も大政ハ関東へ御委任、政を執る者臨機之権道なかるへからす、然と虽ども　勅許を待さる重罪者甘して我等壱人ニ受候決意ニ付、亦云ふ事勿かれとの御意有之、夜も追々更候ニ付、御休息可被遊様申上、直様奥へ被為入候、

九七　中井　弘

1　外国交際ノ大略并兵制民制ノ本原ヲ論スル事

一方今政権新タニ

朝廷ニ帰シ、皇州ノ臣民我ガ固有ノ元気ヲ維持シ、全国ノ力ヲ合一シテ海外諸国ニ対応シ、信義ヲ尽シ（条約上ニ基キ）交易通商シ、万一外国居住ノ公使国士等道義ニ当ラザル応接ニ及ビ、妄りに等級ヲ越へ、外務省ヲ捨テ、（突然）政府ニ逼り（彼国ト見テ）驕慢無礼使節ノ躰裁ヲ失シ、虚喝ノ勢焔ヲ以テ談判スルニ於テハ、断然決然其無礼ヲ詰問シ、若シ強情ニ募り、益々軽侮辱罵ノ時機ニ到る時ハ公法ニ基キ（条約ヲ押シ不侮己）在住ノ公使ト絶交シ、右ノ始末ヲ本国ニ申シ送り、其是非曲直ヲ正スベキナリ、本国モ（万一）亦其理ヲ非トシ、妄りニ理外ノ強情ヲ張り来らバ、其曲直明白ナルヲ以テ、譬ヒ兵ヲ動スト雖トモ、何ノ懼リカアランヤ、則チ我全国臣民男女大凡四千万ト見テ、士卒族大凡弐百万ノ兵同心協力、之ト兵ヲ交へ、譬ヒ幾年月ヲ経ルト雖トモ、皇州人種ノアラン限リト決定（シ、ハ以テ彼ガ呑噬ノ胸ヲ破リ、二ツハ以テ我ガ自主自立ノ国権ヲ保ントス）外務省ハ則チ外国交際ノ全権ナリ、今ヤ外務官員在レドモ無キガ如ク（徒ニ奇輩ノ往復周旋ニ供シ）加之公使等ハ朝廷（長官ノ饗否ヲ察知シ多クハ其ノ）長官ニ応接ヲ乞ヒ、外務官員ハ偶然其席上ニ連座シ、其枝葉瑣末ノ事件ヲ戦々競々ト演説シ、若シ大（条理ノ在ルヲ知ツテ知ラザルガ如ク或ハ）誤ツテ都合スレバ、公使忽チ左右ヲ顧ミ、辱罵万状至ラザル処ナク（王室ノ条約ヲ結定スル能ハザルハ）真ニ慨嘆ニ堪ヘザルナリ、或人曰ク、丁卯戊辰以来、我大政新タニ（シテ依然）幕府ノ交際ヲ引受、種々失策モ多ク、且ツ幾度モ外国人ヲ斬殺シ、或ハ国債等も夥シケレバ、今日何程道義ヲ以テ談判ストモ、其詮ナキノミナラズ、却テ許多ノ損失ヲ醸成シ、終ニ兵ヲ動カスニ至ラバ、我レニ兵備ノ対応スベキナク、沿海ノ民（今）道路奔命ニ困窮シ、其中自然支那天津広東ノ役ノ如ク、諸藩ノ間にモ（シク）竊に異図ヲ蓄へ、外国ヲ導誘シ（其奸計ヲ助ケ）自己ノ私欲ヲ謀ル者モアルベシ、是等之大害眼前ナル時ハ、兎角今日の如キハ（彼ノ長ヲ取リ我ガ短ヲ補ヒ）横須賀造船場モ外国人ヲ雇ヒ、金銀貨幣局モ外国人ヲ任用シ、金銀地金ヲモ外国ゟ買求メ、鉄道局モ外国人ニ一切委任シ（彼ニ十分利ヲ貪マシメ置）然る後ニ年月ヲ経、真ノ兵備充実スルヲ待チ、大ニ彼ガ勢ヲ挫折スベシ、故ニ今日の如キハ先ツ彼ガ気色ヲ損セズ、彼ガ怒リヲ忍ビ忍ンテ、風前ノ物柄ニ等シキ柔弱ノ交際応接ス

ルハ（却テ柔能ク剛ヲ制スル）良全ノ策ナラズヤト云々。如此ノ説盛ンニ行ハレ、人心恟々トシテ上下一致セズ、数十年ヲ経ルニ従ヒ、人民交易通商ノ何物タルヲ知らす（恐ク青血ヲ絞取セラレ）各方向目的ノ定メナキニ迷ヒ、府藩県モ互ニ朝廷ノ鼻息ヲ窺ヒ、敢テ断然道理明白ノ忠誠ヲ抽ンズル能ハスシテ、徒ラニ外国人ノ奴僕トナルヲ待ツハ、互ニ真ニ慨嘆悲憤ノ到りにあらずや、斯クノ如キ曖昧瑣小ノ事愚民ニ流布スル時ハ、我カ固有ノ元気（不知不知）頓に消亡シ、外国ノ皮膚ヲ学び得、直ニ我固有ノ人種を以独立不羈ノ国権ヲ保ツ能ハザルハ勿論ナリ、今日右之説ヲ以テ見ル時ハ、自己ノ爵禄ヲ而已注意シ、国家ノ危難ヲ顧ズ、已ニ在職ノ日（二当リ）種々混雑ヲ醸サズシテ無事太平ヲ（歌フテ）以テ此政治ヲ粉飾シ、一身ノ安逸ヲ竊ムノ大拙策ナレドモ、教化ノ至ラザル人民或ハ信用シ、一度此説ヲ主張シ、以テ我皇州全国ヲ保タントセバ、忽チ彼カ持久老錬ノ計中ニ陥り、彼ノ属国タル印度（米国）新和蘭ノ如キニ至リ、又ハ（経挙ニ馳セ）一旦ノ戦争ニテ莫太ノ償金ヲ奪ヒ去ラレ、其弊ニ乗シテ、我カ人種ヲモ（終ニ）海外移転セラルヽハ必然タリ、即今廟議一定セズ、諸官省モ追々草莽卑賤ノ志ヲ得ザル輩ニ煽動サレ、大ニ怯弱ニ陥ルノ弊多ク、外国人モ其形勢ヲ深察シ、暗ニ喜恍ノ眉ヲ開ケリ、此ノ患所在皆是ナリ、若シ朝廷文武一途海内皆兵ナルベキノ大義ヲ立、太政官及ヒ宮公卿諸侯士庶人モ、我皇州固有ノ元気ヲ体シ、上古祖宗ノ遺業ニ基キ、尚且漢土西洋等英雄豪傑ノ創業セル善法ヲ斟酌折衷シ、先ツ太政官ヲ根本トシ、府藩県ヲ羽翼トシ、其全力ヲ以テ一定一和ノ道ヲ行フ時ハ、兵食ノ大権上ニ在リ、能ク全州ヲ制馭シ、民制兵制ノ紀律確乎動カス、撰挙ノ法モ従ツテ定リ、政体簡略務テ繁冗、蕪雑ヲ省キ、根本堅固ナル時ハ開鎖ノ論モ自ら止ミ、封建郡県ノ議モ従ツテ起らず、互ニ（憂国ノ）目的モ判然明白（臣民競フテ）此皇国ヲ保ツ疑フベキニアラズ、故ニ枝葉瑣末ニ馳セ、利害得失ヲ横議シ、愛憎親疎ヲ以テ人ヲ褒貶黜陟スルノ大害自然に消亡スベシ、徒らニ目前ノ大禍ヲ忘レ、志ヲ（妄リニ）遠大ニ帰シ、始終亡国ノ階梯ヲ謀ル輩ハ、一旦ノ名誉ヲ得ルニ似タレトモ、年月ヲ経ルニ従ヒ自ラ其根迹顕レ、却テ永久ノ大事ヲ失フハ、古今ノ明鑑戒ムベク慎ムヘシ、

○兵部省ニテ諸藩ノ士族兵士ヲ以テ、之ヲ闕下ニ招募シ、親衛兵常備予備警備等ノ兵制ヲ定ムルコト

（頭注）中村曰ク

衣食ノ会計即今不足ナレバ、藩中ノ（ママ）捧禄石高ヲ為替（カワセ）トシ、其不足ヲ大蔵省ニテ給スルモ可ナリトス、

○農工商従来ノ民ハ、即今教化至ラザル無智ノ民ニシテ、衣食住ニ乏シケレバ、長官務メテ之ヲ勧導撫育シ、其産業ヲ固守セシムベシ、妄りに外国教化開成ノ法ニ基キ、之ヲ兵員ニ編成スル等ノ弊習ヲ除クベキナリ、我全州学校技芸教化数十年ヲ経テ開成セルノ後ハ、又西洋文明ノ俗ヲ斟酌シテ可ナルベシ、

（頭注）同

農工商ノ兵廿歳ヨリ四十歳ニ至リ勤役畢リ、郷ニ帰ル者ハ尽ク之ヲ給食所ヲ得マシムルコト能ハザルハ必然ナリ、故ニ廉恥節義固有ノ元気アル士族ヲ以之ニ充ツ、

○双刀ヲ帯ル士卒族ハ便チ兵ナリ、輒チ隊伍ニ編成シテ、四列五列等ノ法ニ因リ、之ヲ養育スベシ、宮公卿諸侯朝官等、妄リニ武士ヲ家中ニ蓄ヘ奴僕トナシ使役シ、免許ヲ受ザル無頼ノ遊民ヲ扶助スル時

ハ之ヲ糺弾シテ、兵部省ヨリ之ヲ明細ニ出処姓名ヲ記シ、其処ヲ得セシメ養育シ、編伍ニ充ツベシ、又ハ農工商等私ニ双刀ヲ帯シ、自己ノ分ヲ守ラズ、妄りに△遊放（士族ト偽称シ）ノ所業ヲナス者ハ尽ク之ヲ招入△（説諭）シテ其所ヲ得セシムルニ在リ、

（頭注）中井曰ク

兵部ノ制度一定セバ、兵隊ト官員トヲ除クノ外免許ナキニ、兵器ヲ家ニ蓄フコトヲ厳禁スベシ、此令施行シテ命ヲ奉ゼザル者ハ、断然之ヲ処置シテ当然ナリ、之レ兵制ノ因テ興ル所以ナリ、

○衣服ノ制、頭髪ノ制、勤メテ簡略ヲ要ス、雨露ヲ凌キ寒暑ヲ避ケ、攻戦ニ軽便ナルハ上古ノ遺風ナリ、即今西洋ノ風俗ヲ以テ之ヲ斟酌シ、我皇国ノ目印ヲ表シ用ウル時ハ、譬ヘ外国ノ制ニ髣髴タリトモ、何ゾ区々タル小事ニ係リ、大事ヲ廃棄スルノ暇アランヤ、勿論馬車・砲車・蒸気機関等ノ如キ、遠方ニ諸物品ヲ搬運輸送スルニ便ナル者ハ尽ク之ヲ採用シ、所謂家ニ余財アレバ兵器ヲ製造スベキノ語ニ基クベシ、

（頭注）士卒族凡弐百七十万人余

○我朝開化以来、外国ノ憂今日の如キ者ナシ、所謂一方ニ割拠セル武田・上杉・北条等の如キ、互ニ内地ノ争戦トナリ、又ハ覇権ヲ争ヒ、自己ノ封疆ヲ保護シ、各隣国互ニ鎖鑰シ、隣人ヲシテ其城府ニ周遊セシムルヲ禁ズル如キ、井蛙管見ノ知識ヲ以テ、骨肉同類互ニ敵視シテ一定一和ノ時ナシ、　朝廷徒ニ虚器ヲ弄シ、深宮ノ内官宦権ヲ弄シ、僅カニ今日ノ衣食ヲ供御シ、甚シキニ至リテハ保元・平治ノ如キ大乱ニ陥リ、殆ト綱紀地ニ落ントスルニ至ル、然トモ上天斯ノ皇基ヲ以テ今日ノ大盛事ニ至ラシムル、又天時ニ依ルト雖トモ実ニ人事ニ因ツテ然ルナリ、故ニ臣民一ニ此興廃治乱ノ蹟ヲ見テ、深ク察シ遠ク慮リ、外国ノ患先例ナキヲ監ミ△（我ヨリ古ヘヲ為シ）以テ大ニ奮励激発、固有ノ元気ヲ培養スルヲ要ス、徒に安居坐食、無益ニ年月ヲ過ス時ハ、実害忽チ不測ニ生シ、今日の安楽ハ他日の禍害ト変ズルハ鏡中ノ影の如シ、能ク過去現在未来之情実ヲ熟考暗記シ、我海陸軍兵ノ△（自在ニ）進退奔馳スルヲ見テ、始テ安全太平ヲ唱フルハ亦難キニアラザルベシ、識者之ヲ裁セヨ、

根本定ツテ枝葉穏ナリ、今其弊害ヲ演説シ、其要件ヲ掲ゲ極言ス、其枝葉顚末ハ自ラ国家其人ニ乏シカラズ、宜シク根本確定セバ、立地ニ其細目ノ制度挙ルベシ、憂フルニ足ラズ、

2　新聞社祝辞

内外ノ政治風俗人情ヲ説キ、其利害得失ヲ談シ、農工商ノ盛衰ヲ判シ、凡ソ人間社会ニ現出スル事大小トナク之ヲ諒知解釈シ、智識ヲ開進シ耳目ヲ新達スルモノハ、新聞紙ヲ措イテ他ニ求ムベキモノアラサルナリ、新聞ノ効用亦大ナルカナ、余亦新聞ノ効力ニヨリ、智識ヲ開達増進スルコト多年、毎日新聞ヲ購読スルコト日ニ数十種、社説ヲ見テ以テ其持論ノ主義ヲ窺ヒ、外報ヲ閲シテ外国ノ形勢ヲ察シ、雑報ヲ読ンテ民間の利弊ヲ知リ、年ノ豊凶、商工ノ張弛、勧善懲悪、細大残サス其便益ヲ蒙ルハ少小ニアラサルナリ、新聞ノ効用亦大ナリト謂ツベシ、自今益其業ヲ盛大ニシ、彼外国ノタイムスゴローテバトリビヨン等ノ上ニ凌駕シ、進ンテ社会ノ公益ヲ謀リ、各般ノ事業ヲ左右スベキ権力ヲ有スル、余之ヲ将来ニ希望スル処ナリ、聊一言祝辞ニ代フ、

3　椿山荘招飲詩

甲午五月廿日椿山荘招飲賦、示含雪・青山・槐南・種竹・寧斎・錦山諸君　　桜洲山人

王化皇風六十州　関東覇気漠然収　中興事業垂青史　佐命功名半白頭
緑樹陰濃月含水　杜鵑花散客憑楼　佳游最喜今宵会　只願聯吟春又秋

4　論功行賞論

皇政改新之実効相建候折から、奥羽北越之賊徒党起王化ニ帰順セズ、屢官軍ニ角逐シ其勢甚強暴ニシテ、征討ノ官兵粉骨砕身肝脳地ニ塗レ、雨沐風櫛尽力并ビ至リ、今日ニ至リ益奮励大ニ賊徒ヲ誅伐シ、数ケ所ノ嶮城ヲ砕キ、過半既ニ平定ニ到リ候は、畢竟皇徳輝海内ニ延及シ、上下心ヲ一ニシ公平ヲ旨トスルノ致ス処、偏ニ兵士ノ忠勇義烈、誠心貫徹スルニ依テナリ、今日ニ奥羽之報告を伝聞スル毎に、兵士ノ力戦死而後止むを追憶スレバ惨然流涙、方寸裂くか如ク、実ニ感銘ニ堪ざる也、謹而深慮仕候に、江戸は東国第一の大鎮ニシテ、山を帯び海を控、世界中有数之都会なるに、臣等不肖之身を以、即今太政官ノ御主意ヲ体シ、其順席ヲ条理を趁ひ施行スルヲ以本職とナシ同一協力、今時ノ公用ヲ勉励罷在候折から、彼旧幕旗下ノ士大夫ヲ御擢用相成候義、名ハ人心撫育の良法ト称シ、其実ハ無根ノ浅法ニ而、旧幕有為ノ士市中着実ノ人民ハ、我政府ノ気力根底ナキヲ嘲笑スルニ至ル、賞罰明亮ナラザルバ、第一政度ノ皇政改新ノ効顕レがたく、況や旧幕に属スル地方官の如キは、数百年其土地ヲ私シ、人民ノ膏血ヲしぼり、加之其付属ノ小吏奸曲并至リ、百姓其苛政ニ苦ムコト茲ニ数百年、人民此弊害を掃除せんと希望スルモノ所在皆是ナリ、然ルに今日皇政一新之後、其弊害更ニ掃除セス、徒ニ姑息ノ私情ニ繋レ、有名無実ノ風自然に増加シ、名ハ人民撫育上下安泰ノ道ヲ施スモ、其実ハ懶惰因循僥倖シテ、今日の政治を求ントスルニ近シ、実ニ嘆慨に不堪也、固ゟ旧幕ノ地方官ハ世録ヲ襲ひ、其付属の小吏八方に手ヲ配リ、其膏血をしぼる今日に到りては殆ゟ地方官泯滅に到らんとする折から、奸吏往々佞媚を献シ、愁訴百端臭体実ニ極ル、即今皇政一新ノ妨碍ヲナス者之に過たる弊害はあらし、自今奥羽征討ノ兵士凱還之節、何を以カ其功ヲ賞シ、何を以カ其誠忠ヲ表せんや、其罰スベキヲ罰シ、其賞スベキヲ賞スルハ政治ノ本体にして、〔後欠〕

5　蝦夷地は北門の要領ニ付、急速より開拓之処置可被及旨趣、御告例之文案早々取調可差出旨補相被申聞候故、立筆可申事、

五月三日　　中井弘蔵

6　過刻之告諭文案持出シ商議候処、「　」之数字面実際之患憂ハ原稿之通ニ候処、自然此書付、新聞紙にて魯人及披見候時ハ不都合故取消、別ニ旨赴(趣カ)差加候様との事也、再考之末明日十二字迄ニ　皇居可被差越候、交際ニ付布告之方脱稿も、此使へ可被相渡也、

却前夜　　中井

7　只今捕亡方ゟ探索書面中、貴君之姓名呼棄に認め有之趣被仰聞致承知候、右は全ク捕亡方之者数十年学校ニ入塾、天文・地理・究理・算術・政治職制等之学術ニ通達不致者のミ多く、所謂日本人ハ是迄支那固陋之学のミ多く、高貴之者と雖トモ、多くハ皆不学不文ニ而、実ハ開けざる不教之人民ニ候条、夫々度々間違之儀有之、当惑いたし申候、貴国之儀者数百年政治能く相整、諸事無手洩、条理判然御施行相成候目

ゟ見る時ハ、日本人か愚昧なる禽獣同様ニ可有之、就而者此上精々申諭、失礼之儀無之様いたし度、右捕亡方之者は屹与叱り倒し置可申、此旨貴報迄如此御座候、以上、

十月三日

会津肥台か書さし出申候間、御覧可被下候、別ニ近日公然と御布告可申上候、謹言、

乱筆御仁免

8「大英国

密徳院公閣下　　中井弘蔵

□用

謹而奉嘆願候、臣不肖之身を以、当正月以来外国官ノ末職に参シ、当六月ゟ神奈川と江戸の間ニ在勤仕候折から、東京府御創立相成、開市期限も近寄、府内御無人兵馬匆卒之間、不図御雇を以今日迄奉職仕候得共、方今内外御創業天下治乱之際に当り、微臣浅薄之身を顧ミ候処、実以其職任ニ堪へ可申目的も無御座、却而天下之大事を誤候は必然ニ而、日夜苦心仕申候、就而者是迄御雇之職御免被仰付候儀、今日東久世公迄嘆願仕置申候間、此節は是非願之通御免許被仰付、他日苦学勉強之上、万分ノ一を奉報度心願ニ御座候間、何とぞ御明察之上御許容被下度、伏而奉希候、頓首百拝、

十月十四日　　中井弘蔵

9「茅海楼　　松太郎

税所老翁御下　　理三郎　持参

要用　　中井　弘」

炎天、朝鮮ゴタ〳〵、何れ四五日中ニ者黒白相分り可申、子息松太郎外一人避暑ニ罷出候間、片隅江押込メ海水浴御願申上候、私宿料は一日両人ニ而壱円位ニ而御願申上候、何れ其内伊十院と同行、拝謁ニ罷出、万ツ咄可仕候、時分柄折角御加養専要ニ奉存候、頓首、

卅日　　弘拝

税所翁閣下

10「松田宗寿殿　　中井　弘

貴酬　　」

拝啓、然ハ御書面之趣ニ而者、如此事ハ随分入込候儀と被察候、詳細御承知之上ニ而確実と御認め相成候ハヽ、御周旋も可然事と奉存候、小官は内情更ニ存不申、貴酬如此御座候、頓首、

八日

松田君

11「宇賀君　　中井　弘」

記

一貝　　弐拾枚

一草木　　百三十枚

一魚　　九十七枚

一鳥　　七十三枚

一蟲　　百十四枚

一獣　　十八枚

一草腊葉　　六十一枚

右は山本章夫か必生之丹誠を以写生セしモノニ付、希代之珎品と存

候間、代金　ニ而御購求被下、永ク宝物館中ノ末席ニ御蔵蓄被下度奉希望候、匆々頓首、

廿日　　弘拝

12「佐野常民殿　　中井　弘」

要用親展

幹事西村長出張御聞取可被下候、

拝啓、然ハ海陸軍之御勝利、御同慶之至奉欽賀候、扨は仁川辺江赤十字社出張云々御紹介被下候処、馬関迄出張之準備いたし置、又此厳寒ニ際し、仁川江出張候而者、準備茂一層費用を要し候儀ニ付、例応京都人士ハ其負担ニ堪へ不申ハ勿論ニ而、僅ニ壱万余円の積金ニ而者忽消失いたし、再度之を徴収スルモ、博覧会、大極殿其催ノ費用ハ他ノ府県トハ大ニ困難を感し、迚も十分之御請ハ難出来候次第ニ付、其辺御酌量之上、本社ハ十分御奮発被下、外国渡航ハ先以本社之特有ト御認定相成候儀当然之事と奉存候、依而今日之不景気ニ而者、博覧会、大極殿等も亦甚困難之至ニ付、篤与御詳議被下、仁川出張ニ付而者、支部の入費上維持上困難を感セサル様御尽力被下度、奉希望候、前古未曽有之事ニ而、将軍之事も甚不満足ニ而、残念之至ニ而、彼レ鉄道局長ノ威権ハ、愛国の忠情を阻害スルカ如キコト有之候而者、千歳之遺憾ニ候間、能々御審議相成度、此段匆々頓首、

廿日　　弘拝

常民老閣

13　此度木戸氏江金子取かへ候処、自然御持参相成候ハ、相請取、伊勢勝江頼、横山孫一郎殿江御渡相成度奉存候、尚細事ハ横山氏被参候上、御承知可被下候、築地屋敷名面替鄭永寧殿江井上八郎氏を以御掛合可被下候、余は幸便を期し申候、以上、

宿元　　中井　弘

14　別段ニ公有を以て測量器代償可送致之節、公然ト御配慮之御礼ハ申上候得共、尚頭ヲ畳ニ附シ御挨拶ニ及候、大明神様○曽て敦賀港中旧炮台之一件、于今工部之親方ヨリも其照会之結局申遣シ不申、兼而陸軍局江内談御依頼仕候事ハ、是又測量器之如ク、大明神ト云ワル、積りなる哉、暫時ハ東京・前橋も迚も建築着手之都合ニ金詰リ難相運ト想像仕候得ハ、偏ニ我一身之全力米原・敦賀間ニ尽而已、ソシテ世間之御方ニ細工之仕上ケを御覧ニ入、思召ニ叶ひし時、ヤレ東ニ延線、ヤレ西ニト云フ、例ニ世界無類之空詰盛ンニ相行ワレ、然ル後其大詰之幾百分一を実行スルコト、セメテ東京より幾哩歟、前橋之方へ延線ヲ向ケ度モノナリ、因而殊更ニ敦賀線之成功相急キ候間、炮台論無難ニ急速相運候様ニ御尽力希申候、又々菊栄ニもよろしく、

六月六日

15　拝啓、然ハ本日者大椿楼江小集相催候趣、阿部・小松原ゟ申来、是非共両閣下之御臨場を仰き申度候、依而此段分□奉願上候、頓首、

廿日　　弘拝

三島翁

高崎翁

二白、本日者墨水辺ハ取やめ可仕候、少々持病之気味有之、依而此段申上候、